大手前大学論集　第18号（2017）1－25頁

シケリアの僭主政

芝川　治*

要　旨

本稿の対象はシケリアにおける所謂前期僭主政である。それらが身分的支配より発し、それを解体する方向に作用したか否かが問われる。ここで取上げられるのはレオンティノイのパナイティオス、アクラガスのパラリス、テロン、ゲラのヒッポクラテス、シュラクサイのゲロン、ヒエロン等である。これらは概ね寡頭政より出るのであるが、その抬頭の事情は区々様々である。施策も民権の伸張に寄与したとは主張し難い。所謂前期僭主政の特質を昭明たらしむるためには後世のそれをも含めて綜合的に考察しなければならないのであるが、それによると、僭主政は大多数の時期において発生するのではないか。ポリスは構造的に僭主政を生ぜしめやすいのである。それは野心家の簒奪劇に過ぎず、歴史上の特定の潮流に棹さすものではない。この点において、個々の事象に歴史的意味を索める「大歴史」は否定されなければならない。

キーワード：パラリス、ゲロン、発展論

＊大手前大学元教授

シケリアは他の何処にもまして僭主が簇出したとされる地[1]である。本稿ではそこにおける古期の僭主政に関してその歴史的意味を講究する。それは例の如く、専ら「古典学説」の是非に焦点を当てるものである。従って、これは包括的記述を企図するものではない。論述の都合上、話が前後の国制史にまで及ぶ事はある。

一

先ずカルキス系植民市レオンティノイ。ここではパナイティオスが起ったが、それはシケリア僭主政の嚆矢とされるものである[2]。その抬頭はポリュアイノス『戦術書』の叙するところである[3]。レオンティノイ人がメガラ・ヒュブライアと干戈を交えた折、パナイティオスは将軍として貧民 penetes と歩兵とを富裕者 euporoi と騎兵に対し衝突せしめた。戦闘にて後者が利得を貪るのに、それらは蔑ろにされるのみとの由である。彼は閲兵の機を利して馭者をしてその油断せる主人を攻撃せしめ、軽装歩兵 peltastai もそれに加わった。かくしてパナイティオスは僭主となったというものである。

この記述なるが、ペルタスタイ云々は時代錯誤である。パナイティオスの職掌、各兵種の動向など細部や、殊に彼が譎謀を逞しくするなどはポリュアイノスの常套とするところであって、容易には信を置く能わざるものがある。ただ、この件に関してはアリストテレスを引証しよう。これの『政治学』1310b 29-31 よりすると、パナイティオスの僭主政は民衆指導より出来した。また、同書 1316a 34-37 によればパナイティオス以前のレオンティノイは寡頭政であった。

これらに由って顧るに、ポリュアイノスは大綱において承認するを得ようか。アリストテレス、ポリュアイノス、共に政治の基軸を貧富の対立に置くのであるが、その中にてパナイティオスは一方に与同した[4]。大衆煽動も、当然、なしたであろう。メガラとの対立もレオンティノイ建国後の状況よりしても肯なわれる[5]。パナイティオスが寡頭政において将軍の任に就いていたとするならば、彼は有産者層に属したであろう。ただ、それ以上、僭主としての支配期間、施策等、一切不明である。

ダンバビン[6]の説くところであるが、該時期、シケリアにては貧民の不満が醸成されていた。最初の植民者の苗裔たる貴族層が土地と

凡ゆる政治的特権を占有していたため。これはシケリア各地と共通するものであるが、レオンティノイにてはそれに対する忿懣が他に魁けて奔出した。この点においてレオンティノイは進歩的との事である。

ロウバック[7]もこれと類似の視点を採る。これによると、パナイティオスは富裕層より土地を没収し、それを貧民に配分した。彼の政権は短命に畢ったが、その後導入された国制は単なる回帰ではない。従前よりは広汎なる基盤を有する寡頭政であった。かくして、レオンティノイは鞏度の貴族政より穏健寡頭政への変化というシケリア一般の趨勢に棹さすものとされる。ここにはダンバビンと倶に発展論歴々たるものがある。

時代は下るが、ゲラにおいて和平会議が四二四年に開催された後、レオンティノイにおいては内紛が勃発した。トゥキュディデス語るところ[8]では、レオンティノイにては多数を市民として登録し、民衆（デーモス）は土地再分配を策した。有力者層 dynatoi はこれを察知せんかシュラクサイ人を援軍として恃み、民衆を放逐した。その結果、これらは各地を放浪した。有力者の側はシュラクサイ人と協約を締結し、レオンティノイの人煙を絶ってまでシュラクサイの市民権を獲得してそこに移住した。

後日譚までは措くとして、ここには激越なるものがある。土地再分配が計謀されるし、有力者は讎敵とも類い、かつまた民主政下にあったとなし得るシュラクサイに身を投じたのである。これをダンバビン、ロウバックの論法を以ってすれば如何相成るか。この時期にも「貴族政」の構造的危機を措定せざるを得まい。事実は然らず。貧富の角逐はポリスの宿痾にして、如何なる時期にも出来するのである。パナイティオスは歴史に足跡を残さない。そのクーデタは日常的次元を踰えるものとは称し難い。同種の事件は、伝承を欠くのみで、現実には少なからず生起したのではないか。パナイティオスの一件に著大なる意義を賦与すべきではなかろう。ロウバックの援用する碑文[9]やカロンダス[10]も論拠を提供しない。それらは曖々然としか言うべくもないからである。パナイティオスをめぐる史料状況は闇然たるものがあるので、吾人としては禁欲的姿勢を貫くべきである。

パナイティオス以後、長期に亘りレオンティノイの内情は知られない。五世紀初期にアイネシダモスなる僭主が現れるが、これはヒッポクラテス、ゲロンの傀儡[11]である。後世においては、二七八年、エペイロスのピュロスがシケリアに転じた際、ヘラクレイデスなる者がレオンティノイを支配していた[12]。かくなる時期においても僭主は現出するのである。

二

1

アクラガス。これはゲラ人によって拓かれたという。肇国の年次は五八〇年頃である。[13] 植民者にはロドス人も包含されていたものと思考される。[14] もっとも、ゲラ自体、ロドスとクレタの共同建設にかかるものであったが。

ここに出たるはパラリスであった。これは悪虐なる僭主の典型として世に著く、就中、青銅製の牡牛など人口に膾炙するものである。その支配期間は五七〇年頃より十六年程度である。[15] これに関する史料としては先ずポリュアイノス『戦術書』五巻一、一。パラリスはアクラガスの収税人 telones であったが、神殿建立の責任者となって大金を収受し、数多の外人、囚人を雇い、石、木材、鉄より成る大量の資材を丘まで運び上げた。これらが盗難に遭ったと称して、彼は丘に柵塁を築く事となった。彼は囚人を武装せしめてテスモポリア祭中に町を攻撃し、大多数の男を殺害し、婦女子の主となって、アクラガスを掌中に納めたというわけである。

これもまたポリュアイノスに常なるパターンを履む。加之、同書六巻五一、アクラガスを舞台とする話と同工異曲である。ここで、主役はテロンである。彼は護衛兵雇傭の資金に欠乏を来した。神殿建造費をめぐってアクラガスのポリスを弁舌巧みに説伏し、その工事を自らに委任せしめた。彼はその資金を自らの護衛兵のために充当した。かくしてテロンは独裁権力に達したとの由である。

この両件、細部には差違僅少ならずとは雖も、大要にては一致する。共に市民を瞞着した上での権力奪取劇である。この点においてそれらは doublet である。ダンバビン[16]やデ・ワエレ[17]はこの中、五巻一、一を是とする。ゼウス・ポリエウス神殿は開設当初の植民市に相応しく、その建設地もアクラガスの地勢に合致する。テスモポリア祭も妥当なるし、ポリスを構成する諸地域出身者間の軋轢が相互不信を醸成したとの指摘もなされる。

ここにおきても比照さるべきはアリストテレスである。『政治学』五巻十章 1310b 28-29 にはイオニアの僭主同様、パラリスも栄誉ある役より僭主となった旨語られる。ここで「栄誉ある役 time」とは『政治学』の文脈よりしても顕職に他ならない。然らば、これ

はポリュアイノスのtelones[18]とは齟齬を来す如くである。ただ、パナイティオスの項にも見られたように、ポリュアイノス『戦術書』は詳細に亘る穿鑿に堪えるが如き書ではない。上掲の五巻一、一にも判然たらざる箇所や撞着が散在する。それらに拘泥するのではなく、全体としてはそれは『政治学』と合致すると言うべきか。

パラリスの就いた役職は寡頭政におけるものであろう[19]。アリストテレスは『政治学』五巻十章1310b 29-31においてはパナイティオス、コリントスのキュプセロス、アテナイのペイシストラトス、シュラクサイのディオニュシオスを民衆指導者の出となすが、パラリスに関しては然らず。この点はポリュアイノスも同様である[20]。アクラガスの場合、寡頭支配の中、一人の野心家が翹望を遂げたのみといったところか[21]。

もっとも、開設後間もなき植民市において原住民との摩擦抗争は喫緊の課題[22]だったであろう。パラリスもその後、シカノイ征伐に意を用いたとされる[23]。この間、強力なる指導者が必要とされたという事か。彼はまた膨張政策を採り[24]、傭兵も使用したと思料される[25]。これは帝国化[26]への濫觴と評し得よう。パラリスの勢力がシケリア北岸のヒメラに迄及んだとなされる事もある。この間、ステシコロスの寓話[27]が著名である。この詩人はヒメラ出身にして、あたかも、パラリスと時期を近接する。この寓話に対して諾否何れの態度を取るにせよ、ヒメラはシケリア西岸なるカルタゴ勢力圏との疆域に位置する[29]。カルタゴ人との緊張が高まる中で、ギリシア側としては有能なる指導者を欲したなどと説かれる場合もある[30]。

パラリス打倒の陰謀に関しては少年愛との関連にて語られる事少なからずとなす[31]。然るに、結句、それに成功したのはピンダロス・スコリア[32]によればエンメニダイ、ヘラクレイデス・レンボス[33]ではdemosであった。

ヘラクレイデスでは爾後の体制[34]についても記される。これを以ってするならば、該時、国事を司ったのはアルカメネス、続いてはアルカンドロスが先導した。これらは何か。僭主だったのであろうか[35]。さりながら、アクラガス人はパラリスを除去した後、何人と雖も灰色の外衣を纏わざるべし旨議決したという[36]。僭主の従者（親衛隊か）を連想するが故である。パラリスによる苛政の記憶鮮烈なる当時、アクラガス人はおしなべて僭主を嫌忌したであろう。この時点にて、再度、僭主政が樹立されたものであろうか。アルカンドロスはepieikesと形容される。これは「立派な」を意味する。ヘラクレイデスはアリストテレスの抜萃を遺したのである[37]。この哲学者が

僭主にepieikesの語を冠する事は通常ではない。アルカメネス、アルカンドロスは単に民衆を主導したのみか。特に後者の時期には穏和なる政治が行われ、アクラガスは繁栄を謳歌したといったところか。

2

アクラガスにおいて知られる次なる僭主はアイネシダモスの息テロン（四八八－四七二）[38]である。権力への道はポリュアイノスの伝えるところであるが、それは信憑性に乏しいものであった[39]。テロンはその兄弟クセノクラテスと共にオリュンピア、ピュティア、イストミア競技にて優勝を納めた。戦車競争において数次の勝利を贏得、祝捷歌の作成をシモニデス、ピンダロスに依嘱した。テロンが擅権を揮う以前にもそれは行われたから[40]、彼の属するエンメニダイが本来的に資産家であった事は確証される。ピンダロスは『オリュンピア祝捷歌集』第二歌（四三－四七）にて、ポリュネイケスの子息テルサンドロスをテロンの遠祖として立てるが、これは依頼主のために美化したものであろう。系図を仮構するなど造作もない事であった[41]。もっとも、既にテロンの祖は政治において重きをなしていたから[42]、エンメニダイが名門たる事は疑を容れない。

ディオドロス語るところでは[43]、テロンは出生、富、大衆への情愛においてシケリアには比肩する者がなかった。彼の支配も賞辞を呈せられる[44]。彼は衆人の輿望を担って独裁権力に達したのであろうか[45]。ただ、彼が傭兵を用いた可能性は排除は出来ない[46]。

テロンの事績としてはカルタゴに対する勝利は周知のところである。これはヒメラへの介入に端を発す。テロンがヒメラの僭主テリロスを放逐したため、この人物がカルタゴの将軍ハミルカルを勧説したという[47]。大軍を発したカルタゴをシュラクサイのゲロン及びテロンがヒメラにて撃破した[48]。これは徹底的勝利であって、シケリアにおいてカルタゴが蠢動を開始するまでには五世紀末葉を俟たなければならなかった。

この後、テロンはアクラガスを美麗ならしめ、この町は繁栄を続けたという[49]。彼はヒメラをも版図に収めた[50]。この間、アクラガスに社会的変動を惹起せしむが如きが僭主に存したか否かは史料上からは詮議すべくもない。理屈を述べるならば、僭主よりして無用の混乱は欲しなかった事になる。

先考とは異なり、その後継者トラシュダイオスは暴戻であった。[51] それは二代目僭主に屢次に亘って見られるところで、彼はアクラガスにおいても不評噴々であった。エンメニダイはゲロンなどの一族たるデイノメニダイと姻戚関係を結んでいた[52]が、トラシュダイオスはゲロンの弟ヒエロンと隙を生じた。彼は傭兵を多数集め、アクラガス、ヒメラよりも動員したが、敗を取った。ここにアクラガスの僭主政は瓦解した（四七一年か）。

3

ディオドロス[53]によるならば、向後、民主政が布かれた。ただ、ディオドロスにあっては概念的思考は必ずしも十分ではない。この場合も、それは僭主なき体制を意味するのみかもしれない。この間、アクラガスは亡命者を召喚し、傭兵を処置した。[54]

この後のアクラガス史につき参考を供するのはエンペドクレスである。彼の父はメトンなるが、その歿後、アクラガスには僭主政が胚胎した。その際、エンペドクレスは政治的平等を選好してスタシスを中止すべく市民に慫慂したという。[55] これを以って観れば、僭主政崩壊後もアクラガスの内政は安定せざるが如し。

また、彼には千人の集団を解散せしめたとの伝承が存す。[56] 千人や数百人が為政者となるのはポリスにおいて稀としない。[57] これは寡頭政たるが通常である。エンペドクレスはその事を如何なる資格にて行ったのであろうか。彼は評議員の如くであり、[58] 有産階級に属していたから、[59]「千人」の中に名を連ねていたであろう。もとより、委細は知るべくもないが、彼は名門出身に拘らず、[60] 民主的傾向を帯したとの事である。[61] 彼は民主政を樹立したと見るべきである。「千人」は三年間持続したのみとの由である。エンペドクレスの盛年を四四四－四四一年とするならば、[62] この事件はその頃に設定すべきなのであろうか。[63] 然らば、寡頭派による革命は四四〇年代前半となる。[64] トラシュダイオス失脚後、一定年数を閲してからの事となる。

なお、[65] ヘレニズム期のアクラガスにはピンティアスなる僭主が現れている。[66]

三

次いでゲラ。入植の年代はトゥキュディデス[67]によらんか、シュラクサイ開設後四十五年、即ち六八九／八年である。植民の中心をなしたのはリンドスなどのロドス人、次いでクレタ人であった。それぞれを統率したのはアンティペモス、エンティモスであった[68]。更には、ロドス対岸のテロス島[69]や、ペロポンネソス勢[70]の参加をも見た。

ゲラにおいて最初に知られるスタシスはヘロドトス[71]が世に伝えるものである。紛擾が生起するに及んで、それに敗れた者がマクトリオンなる地へと遁走した。テリネスなる地下女神の祭司が女神の稜威によってそれらをゲラに復帰せしめた。この功によってテリネスの子孫はデメテル、コレの祭司を世襲した。この人物がゲロンの先祖とされるのである。

ただ、その系譜関係が如何なるものたるか。この点につき諸説提起されるが[72]、ヘロドトスの記述が茫漠たるもの（progonos, apogonoi）なるが故に確言し難い。「リンドス年代記」[73]も依倚するには足りない。それは歴史的事実が不正確であるから。かるを以って年代も明確になす能わざるものがある。それは七若しくは六世紀に属すというより他はない。

紛紜の原因に関して、一つには民衆が寡頭支配層に対し興起したとの説[74]はなされる。昔時のシケリアにおいては寡頭政多数と目されるが、ゲラもその撰に洩れなかったのである[75]。或は、それは名望家層内部での鬩ぎ合であったのかもしれない[76]。その年代がゲラ建設後、時日を経ざる程であったとするならば、出身地を異にする者―ロドス人とクレタ人―の対立を主としていたのかもしれない[77]。ただ、この問題も史料の現状よりしてこれ以上推究を巡すのは由なきところである。

テリネスはテロス島の出身であった。その情報を遺すのはヘロドトスであったが、彼の筆致[78]よりしても、テロスはゲラ植民に関して付随的との感を禁じ得ない。主力はロドス及びクレタ勢なのであった。テリネスは片々たる小島に生を享けたわけであるし、本来的には、大身の者とは想定し難い[79]。

ゲラにおいて初めて知られる僭主政はクレアンドロスのそれである。それの樹立は五〇五年とされる[80]。この頃、ゲラは寡頭政秩序の

中にあった[81]。クレアンドロスの場合、ドリエウスの遠征やセリヌスにおけるエウリュレオンの独裁権奪取[82]に触発された一面も存したかもしれない[83]。この間、ゲラの社会経済情勢については材料を欠く[84]。クレアンドロスは専権を揮う事七年にして暗殺者の手に斃れた[85]。この背後関係をめぐっても知られるところはない。斃死の年次は四九八／七年か。爾後、地位を襲継したのはクレアンドロスの兄弟ヒッポクラテスであった。この兄弟の父パンタレスはオリュンピアの戦車競技にて優勝した[86]のであるから、それらはエリート層に属したのである。

ヒッポクラテスの戦力としては歩兵よりも騎兵が著名である[87]。殊に全騎兵隊長官に任命されたゲロンは数多の戦闘において赫々たる武勲を示した[88]。アイネシダモスはヒッポクラテスの親衛兵としてゲロンの同僚であった。また、クロミオスも同様であった[89]。これらも騎兵部門において部将を務めたか。歩兵に関してはヒッポクラテスは傭兵を重用した模様[90]。その中において原住民が些少ならぬ比重を占めたか[91]。これらを以って惟うに、ヒッポクラテスにとって信に値するのは富裕市民層であったか[92]。ヒッポクラテス戦死後、ゲラ市民は叛旗を翻したという。ベルヴェの主張[93]するところでは、これはデーモスの蹶起である。

ヒッポクラテスはカッリポリス、ナクソス、ザンクレ、レオンティノイを冒し、更にはシケリア原住民を圧伏した。シュラクサイに対してもヘロロス河畔の戦闘にて勝利を納め、カマリナ譲渡を条件として和睦した[94]。それらの多数には配下を独裁者として派遣したのであった。パタイコスの息アイネシダモスにはレオンティノイを、スキュテス[95]にはザンクレを委ねたと思われるのであった。他ポリスを傘下に納め、ザンクレでは住民の奴隷化、大量処刑をも厭わない[96]。これらの点において帝国化への指向が顕証と化す。ギリシア本土とは異なる所以である[97]。後続のゲロンはもとより、更にはディオニュシオス、アガトクレスの前蹤と称するを得よう[98]。

ヒッポクラテスを襲ったゲロン（四九一／〇[99]）はシュラクサイの関連にて叙すとして、ここでは五世紀末葉四〇六／五年のゲラ。アクラガスがカルタゴ軍によって蹂躙された後、ディオニュシオスはゲラに派遣された。そこにて富裕層（euporotatoi, dynatotatoi）と民衆は紛乱の渦中にあったとの由[100]である。これは吾人に知られるゲラ最後のスタシスであるが、常なるパターンではある。処刑や財産没収が継起するのである。

四

1

シュラクサイに移る。これはコリントスを母市として七三三年に植民された。[101] 指導者はアルキアスであった。この町が王若しくは僭主[102]としてポッリスなる人物を戴いたとの伝承は存する。これはシュラクサイ草創期に属すのであろうか。ただ、これは葡萄酒に関して語られるのみであって、その実像は測知すべくもない。[103]

ヒメラは六四九年[104]、ザンクレを中心として建設されたが[105]、これにはシュラクサイからミュレティダイも参加した。これは党争に破れた亡命者と言われる。[106] これが何を意味するか、ストラボン[107]におけるミュライも問題を提供する。また、暫時の後、カスメナイがシュラクサイによって六四三年頃建設されたが[108]、それとの関連を索める向きもある。[109] ただし、この件に関してはこれ以上の情報が欠如するのであるから、徒に揣摩を巡すべきでない。事実として確認すべきは、古期のシュラクサイにおいて内紛が生じ、或る一族[110]が亡命の憂目に遭った事のみ。

「パロス大理石碑文」三六。ここにおいてはサッポーのシケリアへの亡命が叙されるが、それはシュラクサイにてガーモロイが権力を掌握していた時との事である。その年次は六〇三／二－五九六／五年である。ガーモロイはシュラクサイにおける最初の植民者の子孫として地主貴族層を形成したのであって、その支配は五世紀初頭に到る迄鞏固であったと説かれる事もある。[111] さりながら、「パロス大理石碑文」としては、記年のためであればアテナイのアルコンのみで十分となす。何故にガーモロイを特記したのか。この時点にて、ガーモロイをめぐる何らかの事件が生起したのであろうか。

ガーモロイに関して引かれるのはアガトクレスなる人物をめぐる挿話である。[112] このアガトクレスは他には知られぬが、ここではアテナ神殿建築のための監督に任じられた。然るに、これは資材を流用して豪華なる私邸を建てた。そのために神の怒りを買って処罰を蒙ったという。アガトクレスの資産に関してはゲオーモロイが処置を判定したとの由である。この事より、それらが裁判権を帯したの

は知られる。また、支配層に亀裂が生じた事をも示すのかもしれない。ユア[113]などによればポリュアイノス語るパラリス、テロンによる政権奪取劇[114]とこの話は類似の相を呈する。アガトクレスの場合も僭主政を企図したには非ずやというわけである。ただし、ディオドロスの断片においては、この事件につき、場所、時期、前後の関連は語られない。舞台が真にシュラクサイなのかも判然とはしない。

痴情沙汰の一件[115]。これは明確にシュラクサイの事例に属す。役に就いていた二名の若者の一方が、他方の愛人を誘惑した事より対立を生じ、遂には国民団全体を分裂せしめた。その結果、国制は変転した。かくして、些事より大事が出来するというものである。かくなるアリストテレスに対しプルタルコスの記述するところは、大略、同一である。ただ、そこでは評議会が言及される。また、最善の国制が覆滅したとされるのである。

この事件であるが、時期はアリストテレスによって「古時において」とされるのみ。この際、それはゲロン以前として可とすべきか[116]。アリストテレスはこれが有力者間の紛乱であるところを強調する。それらが国政を領導した如くであるから、その体制は寡頭政となる。これは顚覆したとの事であったが、それはヘロドトスの語るガーモロイ支配の没落とは様態を異にする[117]。今般は支配集団内部における壊頽である。然らば、その集団の実相は如何なるものであったか。

プルタルコスにおいては最善の国制 he ariste politeia が潰残に帰したとされるのであった。これは第一には aristokratia（これはもとより有徳者の支配）でなければならない。少なくとも、それは穏和なる政体を指向する。次に記すように、ガーモロイ体制は寡頭政と看做すべきであるが、それはアリストテレスの分類する第三種寡頭政に近接する如きである[118]。これは「最善の国制」とは表現し得ない。アリストテレス、プルタルコス倶にガーモロイとは口の端に載せぬところであるし、それらの語るところガーモロイ支配下に生起したとはなし難い[119]。その年代も七若しくは六世紀に属すとしか言うべくもない[120]。畢竟するところ、昔時のガーモロイにつき確然たる事実は六〇〇年頃におけるその支配のみか。シュラクサイもまた政治的に不安定たるを免れなかった[121]。

ヘロドトスは七巻一五五にてはシュラクサイよりのガーモロイ放逐を録す。それに続く一五六においてはシケリアのメガラ人やエウボイア人に関し、富裕者 hoi pachees と民衆 ho demos との対抗を彼は見る。シュラクサイにおいても、ガーモロイと敵対するのは民衆並びにキュリュリオイなのである。かく観ずるにおいて、ヘロドトスの脳中においてそれら富裕層とガーモロイは同列に捉えられる

のではないか。従って、その支配は寡頭政となる。[122]

ガーモロイを追放したのは民衆とキュリュリオイなのであった（四九〇年頃か）。[123] 後者は呼称も一定しないが、シケリア原住民を中心とする隷属者と解するより他なかろう。[124] ガーモロイはカスメナイに亡命し、ここにシュラクサイにおいて民主政が樹立された。然るに、これは寸時にして頽落した。それは無秩序、無政府状態に陥り、[125] ゲロンの侵寇を前になす術もなかった。これは四八五年に置かれる。[126] ゲロンとしてはゲラを弟ヒエロンに委ね、自らの本拠はシュラクサイに移した。

2

ゲロンはガーモロイをシュラクサイに復帰せしめた。[127] これらはゲロンの許とは雖、少なくともその社会的、経済的地位は保持したと見るべきである。衰運の定めにあるといった階層ではない。メガラ・ヒュブライアはゲロンに対し戦争を起したが、一敗地に塗れた。[128] それを主導したのは有産者層であった。然るに、これらは咎を蒙らず、シュラクサイに移されて市民とされた。逆に、ゲロンは戦争には責を負わぬ民衆を奴隷としてシケリア外に売却した。[129] シケリアのエウボイア人に関しても彼は同様の処置を取った。[130] メガラなどでは貧富の相剋が激化していたが、その中にてゲロンは一方を選択し、他は擯斥した。彼にとって民衆は共に住まうには不快この上なき輩[131]であった。

帝国化への傾斜は、ゲロンの場合、ヒッポクラテスを継受してそれを深化せしめるものであった。前任者の支配権は保持したと思料される。[132] カマリナのグラウコスもゲロンに従属的であった。[133] その失脚後、カマリナは灰塵に帰し、[134] 住民は悉くシュラクサイに移徙せしめられた。[135] この上、ゲロンはゲラより住人の半数以上を同じくシュラクサイに移転せしめた。[136] メガラ・ヒュブライアとエウボイアは既述の通りである。この他、傭兵を一万人以上シュラクサイに定住せしめ、その市民権を賦与した。[137] かくの如く、住民の掃蕩、移動累次に及ぶ。ただ、この場合、上流エリート層の地位は保持された故、シュラクサイの社会構造は甚深なる変革を蒙らなかったと見るべきである。[138]

ゲロンの死（四七八／七）後、ヒエロンがゲラより移ってシュラクサイの、ポリュザロスがゲラのそれぞれ統治の任に就いた。ヒエ

ロンはゲロンより威圧的とされる。[139] 彼はナクソスとカタネより住民をレオンティノイに移動せしめ、カタネをアイトナと改称した。[140] ヒエロンはイタリア方面にも着目した。海戦にてエトルリア人を撃破している。[141]

これを継承したのがその弟トラシュブロスであったが、これは擅恣の行為を以って鳴る。彼は不法にも多数を処刑し、追放、財産没収を多用したため、資産家層をも含めてシュラクサイ全体が背叛した。ゲラ、アクラガス、[142] セリヌス、ヒメラ更にはシケロイ人よりの来攻をも受け、トラシュブロスは気息奄々、頼れるは傭兵のみと化した。彼は年余を経ずして[143] 地位を退き、南伊ロクロイに退去した[144]（四六六／五年頃）。ここに、ゲロン、ヒエロンによる支配権も壊滅した。カマリナやカタネにも元来の住民が復帰した。[145]

シュラクサイにおける自今の国制、ディオドロス[146]によれば民主政、アリストテレス[147]よりすれば「国制」である。シケリア他市においても僭主は一掃され、民主政が導入されたという。[148] この頃、シュラクサイにては新旧市民の角逐が激化する。[149] ゲロンの下で登録された傭兵が、猶、七千名残存したとの由である。民会においては役職就任資格を本来の市民のみに限定する旨、議せられた。これは旧傭兵を排除せんとするものである。曲折を経て、結句、これらは離去を余儀なくされた。[150]

かくなる動向はシケリア他市にも共通するものである。四六一年、これらは亡命者の召還を議決し、傭兵をメッサナ（旧ザンクレ）に遷徙せしめたという。[151] 全シケリア的に、ポリスは旧市民にのみ属すべきなる観念の下、旧態に復したのである。僭主政の残滓を払拭する事が喫緊の課題であった。この頃、財産返還訴訟が続出したという。[152] それはもとよりトラシュブロスなどの横政に基因するが、それが如何なる程度のものであったか。旧支配層が一変する程の打撃ではなかったか。[153] アリストテレスは語る。[154]「良好なる統治下にありし頃のシュラクサイ人、夥多の僭主政を解体せし」と。これはこの時期を指す。アリストテレスによるシュラクサイ国制の理解、明確を欠く憾みはあったが、[155]「良好なる統治」とは穏健中庸なる政体以外、有るを得ない。これを以って案ずるに、旧来の社会的羈絆を切断した形にて民主政への潮流が澎湃として現出したものではないであろう。トラシュブロスの暴逆も長期には亘らなかったのである。

3

以下は本篇本来の対象とする時期を逸脱する故、略筆に遵う。[156]

四五四／三年頃、シュラクサイにて不穏なる動きが生ずる。テュンダリダスなる人物が貧民を糾合し、僭主の地位を窺窺したという。[157] これの鎮定において主動的役割を果したのは上層有力者 hoi chariestatoi である。しかくして、僭主出現を防遏せんがため、アテナイのオストラキスモスを模してペタリスモスの制度が導入された。然るに、有力市民は追放を危懼し隠遁生活に入った。そのために、卑劣漢の横行を招き政治が堕落する結果と化した。かくの如き経緯を以って、ペタリスモスは短時日にて棄擲されたという。[158] ここで、hoi chariestatoi の僅少ならざる者、旧ガーモロイの末孫ではなかろうか。それらはこの時点にて政治を嚮導し、また公衆より必要とされたのである。

その後、数十年を閲して、アテナイ遠征軍に対して勝利を納めた後、シュラクサイの国制は過激なる方向へと歩を進めた。それはディオクレスの提案するところであった。[159] アリストテレスの言を藉りれば、民衆が戦捷の因をなしたが故に、「国制」が民主政に変転した。[160]

カルタゴ人が攻勢に転ずる中で、四〇五年頃、ディオニュシオスは strategos autokrator に就任した。これを以って、彼の僭主政は開始したとなすべきである。その死歿（三六七年）後、天下、麻の如く乱れる。ディオニュシオス二世、ディオンを経て、各地に小僭主が簇生する。それを一旦、収拾したのはティモレオンであった。これはシュラクサイにて国制を定めたが、それは穏健民主政と括言し得よう。この後も混乱は熄まぬが、アガトクレスの僭主政やピュロス王招致、ヒエロン二世を経てローマ支配に到る。ここにてようやくシケリアは一時の平穏を得たか。[161]

五

それでは、シケリアに関して所謂前期僭主政の特質、歴史的意義とは何か。それは「貴族政」から「平民」支配へという滔々たる大流における過渡的政権であったのであろうか。

先ず、僭主が社会構成、統治構造の変革を将来したか否か。この点、候補に上り得るのはパナイティオス、パラリス、トラシュダイ

オス、トラシュブロスである。この中、前二者は判知し難い。後二者はこれを首肯するには躊躇される。[162] それらよりも社会を震憾せしめたのはディオニュシオスやアガトクレスではないか。学説史において特筆されるのは前者である。

ディオニュシオスは民衆煽動によって擅権を得た後、政敵の鏖殺、追放、財産没収など矯激なる施策を一再ならず実行。その資産を友人や民衆に授与。土地再分配、奴隷を解放して市民権を与える。傭兵の多用、それもシケリア原住民のみならずイタリアのそれをも用いる。それらをも市民となす。他市よりの住民移動、征圧した地の破壊、遺棄、その住民を奴隷として売却。帝国化への指向、それも南伊までの進出等々と、ディオドロス（ティマイオス）による文飾はあろうが、ここには凄絶なるものがある。soziale Revolution, Umbau des Staates[163]などと称されてきた所以ではある。[164]

往昔のシケリアにおいて僭主政の大多数は寡頭政より発すとされるのであった。[165] そこにおいては富者が優位に立ち、貧民がそれに対抗する事となる。ところで、五世紀中葉以降であるが、社会階層の一方の側として chariestatoi, dynatoi, beltistoi, gnorimotatoi, endoxoi, epiphanestatoi[169]などの表現が見られる。一般に、これらの用語は学説史においては「世襲貴族」を意味するとされてきた。[170] 然るに、事実はそうではない。それらは相対的富裕層、有力者の謂に過ぎない。実際、ゲラにおいては euporotatoi と dynatototatoi が同一視されていた[171]ではないか。ギリシアにおける寡頭政の主権者とはその程度のものなのである。従って、それらは時空を問わず存するのである。僭主としても、それらに対抗した場合でも、身分制的支配秩序の打破などを策したものではないのである。[172] 第一、そのような秩序の形跡など観取されないではないか。

かく以って討究を進めるに、シケリアの前、後期僭主政に質的差違を設定すべきなのであろうか。ディオニュシオスであるが、これはヘレニズム期における新潮流を告知するとか、[173] 四世紀におけるポリスの危機を示すとか唱えられてきた。[174] ただ、前述した彼の施策は何れも先人を継承したものである。量的に拡大しているのは事実ではあるが。ダイニンガーはそこに「構造的連続性」を見る。[175] 確かに、カルタゴ人との抗争、原住民、傭兵の問題、貧富の対立、帝国化など、シケリアとしての共通要素は一貫する如きである。政治の枠組は旧態を逐うのみと評するも可能である。

そうすれば中間期の意義は奈辺にあるのか。四六六／五年頃より四〇六年に到る迄、シケリアは僭主なき時期を迎える。その理由で

あるが、一つには暴政の経験が作用したのではないか。トラシュブロスやトラシュダイオスの暴乱を鑑戒とした一面はあろう。ただ、更に重要なのは外圧ではないか。この点、シケリア原住民との関係にも顧慮を払うべきであるが、先ず指を屈すべきはカルタゴ勢力である。ヒメラにて惨敗を喫した後、カルタゴ側はシケリア極西部に逼塞し、その脅威は過去のものと化した。それが五世紀末に再度迫切するに及んで、僭主政が須臾にして再現した。ギリシア側としては強力なる指導者を必要としたのである。

ただ、それにしても、五世紀、或はシュラクサイにては四世紀に到る迄、民主政の存在は無視し難いのではないか。これにはギリシア本土と共通する一面はあろう。アリストテレス理論も一助となる。これは民主政増加の理由として人口増大、都市拡大、戦術の変化を挙げるのであった。[176] この中、前二点はシュラクサイに該当する。第三点に関しては、シュラクサイの海軍力が比較的に有力であった旨、指摘しておこう。[177] これらをめぐってはシュラクサイ以外のポリス、殆ど知られるところはないのであるが。

例の深遠なる理論は如何であろうか。これは身分秩序壊廃より民主政の興起といった過程を、ギリシア一般としては、不可逆的進行として把握するのであった。シケリアに関して、ここでは後期、ローマ治下の状況につき一言しておく。キケロ『ウェッレス弾劾』を繙読するに、nobilis 乃至その類縁語が頻出する。これらはシケリア各市にて重きをなせし如くである。然れば、ここに寡頭支配体制、[178] 安定を見た事になる。そうとするならば、シケリア史の進行はむしろ円環状を呈するのかもしれない。初期には寡頭政が優越し、中間期を夾んで後期には寡頭政が再帰、繁栄したのである。もっとも、これは現段階においては仮説であって、一層、精思、熟考を重ねなければならないのは言を俟たぬところである。

これらによって観るに、シケリアの僭主政は発展論の一齣などではない。それは恒常的形態なのである。僭主政の本質とは個人による暴政である。そのようなものはギリアのポリス、殊にシケリアの如き地においては機宜に応じて常に出来するのである。[179]

註

（1）Diod. XIX. 1.5. Malista de panton epepolasen he pros tas monarchias horme peri Sikelian pro tou Rhomaious kyrieusai tautes tes nesou.; Cicero, *Verres* II. v. 145.

(2) Euseb. *Chron.armen.* (Schoene, ii. 90). Panaetius primus in Sicilia arripuit tyrannidem. 年代としては六〇八若しくは六一五年が与えられる。

(3) V. 47.

(4) Cf. H. Berve, *Die Tyrannis bei den Griechen* I. München 1967, 129. „…er (Panaitios) als einziger der sizilischen Tyrannen durch Bemühung um das niedere Volk sich den Weg zur Alleinherrschaft bahnte.“

(5) Thuk. VI. 4.1; Polyainos, V. 5. 1–2.

なお、バージャー（S. Berger, *Revolution and Society in Greek Sicily and Southern Italy*, *Historia*, Einzelschriften71, Stuttgart 1992, 26）によれば、パナイティオスの党与にはシケリア原住民が包含されていたか。cf Thuk. VI. 3.3; Polyainos, V. 1.

(6) T. J. Dunbabin, *The Western Greeks*, Oxford 1948, 66–67（以下、Dunbabin と略す）。

(7) C. Roebuck, Stasis in Sicily in the Seventh Century B. C. Φιλίας Χάριν, *Miscellanea di studi classici in onore di Eugenio Manni* VI, 1980, 1923–1930. 特に 1927–1928。

(8) V. 4. 1–3. cf. Diod. XII. 54.7, 83.1.

(9) L. H. Jeffery, *The Local Scripts of Archaic Greece*, Oxford 1990, 242.

(10) カロンダスはザレウコスと共に後述する。註（179）。

(11) 本篇一五ページ。cf. Pausanias, V. 22.7.

(12) Diod. XXII. 8.5.

(13) Thuk. VI. 4.4.

(14) Schol. Pindar. *Ol.* II. 15a, 15b; Polyb. IX. 27.8. cf. Dunbabin, 310–311.

(15) Euseb. *Chron. armen.* (Schoene, ii. 94); *Suda*, s.v. Phalaris 他。

(16) Dunbabin, 315–316.

(17) A. J. de Waele, *Acragas Graeca*, den Haag 1971, 104.

(18) W. Schwahn, Τέλωνα, *RE* 2 Reihe V 1, 1934, 418–425.

(19) Ar. *Pol.* 1310b 22–23, 1316a 34–37.

(20) デ・ワエレ（De Waele, *op. cit.* 164）はパラリスの抬頭が貴族支配に対する民衆の反発たる可能性を考量する。ただ、ポリュアイノスからはそのような形跡は看取されない。なお、ルキアノスの『パラリス』一、三などにては民衆への配慮が語られるが、これは修辞上の所産に過ぎない。

(21) 贋造パラリスの書牘（Ps. -Phalaris, ep. 4, 35）よりせんか、彼はコス近傍アステュパライアの出身である。もしもそこに幾何かの真実が含まれるとするならば、彼はアクラガスにおいて民族的少数派（De Waele, *op. cit.* 164）に属した。各地域出身者の対抗関係においてそれは意味を有したか。

(22) Schol. Pindar. *Ol.* II. 15b.

(23) Polyainos, V. 1.3–4. cf. *Amagraphe von Lindos*, F27 (Jacoby).

(24) Diod. XIX. 108. 1-2. パラリスの内政に関しては抑圧策以外殆ど材料を欠く。武器没収はポリュアイノス（V. 1.2）によって、一応、伝えられる。殺戮は Heraclid. Lemb. *Exc. pol.* 69 など。

(25) Cf. Polyainos, V. 1.2; Aelian. *Var. Hist.* II. 4; Plut. *Mor.* 821E. 傭兵の主力をなすのは原住民であったか。Polyainos, V. 1.1.

(26) トゥキュディデス（I. 17）はこれをして、ギリシア本土とは異なるシケリア僭主政の特色となす。

(27) Ar. *Rhet.* 1393b 8-22.

(28) Cf. G. Busolt, *Griechische Geschichte*^{2} I. Gotha 1893, 421-422; De Waele, *op. cit.* 106-107.

(29) なお、レオンティノイをめぐってはcf. Diogenianus, *Paroem.* II. 50.

(30) Busolt, *loc.cit.* ソの時期における両勢力の対抗関係に関してはcf. Dunbabin, ch. XI; A. Schenk Graf von Stauffenberg, *Trinakria*, München 1963, 19-25.

(31) Herakleid. Pont. F 65（Wehrli）; Hieronym. F 34（Wehrli）; Aelian. *Varia Hist.* II. 4 他。また、Diod. IX. 30.

(32) Schol. Pindar. *Ol.* III. 68b, 68a. 更に *Ol.* II. 82d, 29d。エンメニダイは、当初、ロドスに居住していた。後のアクラガス僭主テロンはこの一門に属し、テレマコスの曽孫とされる。本論文一二ページ。ただ、これらスコリアは系譜、事績をめぐって相互に乖離するところ些少としない。パラリス打倒を果したのはテレマコスとするのか、エンメネスとなすのであろうか。

(33) *Exc. pol.* 69. ここでdemosは僭主の圧制に対する復仇としてその母、友人をも焼殺したという。

(34) テレマコスへの王位授与に関してはDunbabin, 322-323; Berve, *op. cit.* I. 131-132.

(35) Dunbabin, 323.

(36) Plut. *Mor.* 821E.

(37) ヘラクレイデス・レンボスの人物並びに方法に関してはH. Bloch, Herakleides Lembos and his *Epitome* of Aristotle's *Politeiai*, *TAPA* 71, 1940, 27-39.

(38) Diod. XI. 53.1.

(39) 上述一〇ページ。

(40) これは四九〇年。Schol. Pindar. *Pyth.* VI. inscr. ピンダロス『ピュティア』第六歌はクセノクラテスの優勝に対する頌歌である。

(41) Schol. Pindar. *Ol.* II. 82d.

(42) 註（32）。

(43) Diod. X. 28.3.

(44) *Ibid.* XI. 53.2. ティマイオス（F93. Jacoby）がテロンに対して王の呼称を用いるが、これに関してはBerve, *op. cit.* I. 132.

(45) Cf. De Waele, *op. cit.* 167.

(46) Polyainos, VI. 51.

(47) Hdt. VII. 165.

(48) これは四八〇年の事（Hdt. VII. 166）。

(49) Berve, *op. cit.* I. 134, II. 596.

(50) ヒメラの統治はテロンの息トラシュダイオスに委ねられたが、これは暴政を布いた。ヒメラ人は離叛を試みたが、テロンはそれを鎮定し、逆徒を誅戮した。それはヒメラが人口不足を来すほど多数に上ったという。ために、テロンはヒメラにドーリス人などを導入したという。Diod. XI. 48.6–49.4. テロンにはかくなる側面も、当然、存したわけである。なお、ヒメラ進出はパラリスの先蹤を履むものであろうか。

テロンの縁者たるカピュスとヒッポクラテスも反抗を企てている。Schol. Pindar. *Pyth.* VI. 5a, *Ol.* II. 173g.

(51) Diod. XI. 53.2. なお、cf. E. W. Robinson, *The First Democracies. Historia*, Einzelschriften 107, 1997, 79.

(52) Timaios, F93（Jacoby）他。

(53) Diod. XI. 53.5.

(54) *Ibid.* XI. 76. 4–6. cf. P. Ox. 665（577.1. Jacoby）.

(55) Diogenes Laertios, VIII. 72.

(56) *Ibid.* VIII. 66.

(57) 西方における千人の集団はレギオン（Heraclid. Lemb. *Exc. pol.* 55. ここにてレギオンの国制は aristokratike となされるが、これは寡頭政の美称。事実、chilioi... hairetoi apo timematon と記される°）、ロクロイ（Polyb. XII. 16.10）、クロトン（Iamblichus, *De Vita Pythagorica*, 35.257, 260）が知られる。

(58) Diogenes Laertios, VIII. 65.

(59) *Ibid.* VIII. 66.

(60) *Ibid.* VIII. 51.

(61) *Ibid.* VIII. 66.

彼は自己に奉呈された王位を謝絶したとされる。*ibid.* VIII. 63. 宴会の逸話は *ibid.* VIII. 64°。医師アクロンに対して公平を強調したのは *ibid.* VIII. 65°。

(62) *Ibid.* VIII. 74. また VIII. 51°。cf. W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy* II, Cambridge 1965, 128.

(63) 諸事件の経過に関して一案を示すのは De Waele, *op. cit.* 171–172.

(64) エンペドクレスが故国を追放されて異郷に客死したとの伝承も存する。Diogenes Laertios, VIII. 52, 67. これを以って然りとなすならば、これは寡頭派の策謀に由るものとなろう。アクラガスには紛乱相次いだか。

(65) 五世紀末より四世紀にかけての擾乱をめぐっては Berger, *op. cit.* 17–18.

(66) 二八九－二七九年（De Waele, *op. cit.* 143）。これの背景に関しては cf. *ibid.* 143, 173°。その後のソシストラトスは Diod. XXII. 8.4.

(67) VI. 4.3.

(68) Hdt. VII. 153.1; Thuk. VI. 4.3; Diod. VIII. 23.1; Athenaios, 298a; Pausanias, VIII. 46.2; Schol. Pindar. *Ol.* II. 16b.

(69) Hdt. VII. 153.1.
(70) Schol. Pindar. *Ol.* II.16b.
(71) VII. 153.
(72) J. P. Kesteman, Les ancêtres de Gélon, *AC*39, 1970, 397–398.
(73) *Anagraphe von Lindos*, F28（Jacoby）.
(74) E. g. J. Schubring, Historisch-geographische Studien über Altsicilien. Gela. Phintias. Die südlichen Sikeler, *RM* 28, 1873, 125.
(75) Ar. *Pol.* 1316a 35–37. なお註（138）。
(76) E. g. Dunbabin, 64.
(77) Cf. Berger, *op. cit.* 24. ゲラ人が逢遇した困難をめぐってはcf. Schol. Pindar. *Ol.* II. 16. b.
(78) VII. 153.1.
(79) 贅語を連ねておくと、祭祀と政治的影響力は各々、別箇の次元に属す。芝川治『ギリシア「貴族政」論』、晃洋書房、二〇〇三年、三五一ページ註（29）。
(80) Dunbabin, 432–434.
(81) Ar. *Pol.* 1316a 37.
(82) Hdt. V. 46.
(83) *Ibid.* VII. 158.2.
(84) Cf. Dunbabin, 377.
(85) Hdt. VII. 154.1.
(86) Die Inschriften von Olympia. nr. 142.
(87) Dunbabin, 404–405. これによらんか、ヒッポクラテス軍の中核は騎兵にあった。彼が艦隊建造に着手する迄には若干の時日を俟たなければならないとの由である。
(88) Hdt. VII. 154.2.
(89) Schol. Pindar. *Nem.* IX. 95a. ピンダロスのネメア祝捷歌一、九はクロミオスを讃称するものである。殊に *Nem.* IX. 34.
(90) Polyainos, V. 6. Dunbabin, 404; Berve, *op. cit.* I. 138.
(91) Polyainos, V. 6. cf. Berve, *op. cit.* II. 599.
(92) この事はゲロンにあっては明白である。後述一八ページ。
　ザンクレにおいてヒッポクラテスの傀儡僭主スキュテスが町を喪失した際の措置であるが、ヒッポクラテスはザンクレ人を裏切ったという。彼はザンクレ人の大多数を捕縛して奴隷となし、重要人物三百名を処刑すべく、ザンクレを占領したサモス人に引渡した。Hdt. VI. 23. ここにてはヒッポクラテスは要人を警戒した。これはその都度、私利に適う行動を取るという事である。cf. Diod. X. 28. 1–2. これもシュラクサイ征圧

を目的とする御都合主義的行動である。

(93) Berve, *op. cit.* I. 140. cf. Hdt. VII. 155.1.

(94) Hdt. VII. 154. 2-3. 註（134）。

(95) これらに関しては本篇九、一五ページ、註（92）。

(96) 前記註（92）。

(97) この点は既にアクラガスのパラリス、テロンに関して指摘した。上記一一ページ、註（26）、（50）。

(98) Cf. Dunbabin, 406.

(99) Hdt. VII. 155.1.

(100) Diod. XIII. 93.2-3.

(101) Thuk. VI. 3.2 他。

(102) *Etym. Magn.* (Gaisford), 197.35.

(103) Cf. Dunbabin, 93-94. 史料は Ar. F. 602. 1-4 (Gigon); *Anagraphe von Lindos*, F31 (Jacoby) 他。

(104) Diod. XIII. 62.4.

(105) Thuk. VI. 5.1.

(106) *Ibid.*

(107) VI. 2.6.

(108) Thuk. VI. 5.3.

(109) *E.g.* W. Hüttl, *Verfassungsgeschichte von Syrakus*, Prag 1929, 48-49; Dunbabin, 56-57. また、Roebuck, *op. cit.* 1924-1925。ヒュットルやロウバックは後出の情話との関係をも説く。なお、ロウバックはミュレティダイの一件に高度の歴史的意味を賦与するのであるが、これに関しては本稿九ページ参照。

(110) これは clan といったものではない。念のため。

(111) Cf. Wickert, Syrakusai, *RE* 2 Reihe IV, A2. 1932, 1480-1484. 他方、ヒュットル（*op. cit.* 48-51）によらんか、シュラクサイにては当初、血統貴族が国制を把持したが、それは六四四年に終焉を迎えた。それに代ったのがガーモロイであって、それは有富を誇る地主層であったという。

(112) Diod. VIII. 11.

(113) P. N. Ure, *The Origin of Tyranny*, Cambridge 1922 (Reprint. New York 1962), 276-278.

(114) 本論文一〇ページ。

(115) Ar. *Pol.* 1303b 20-28; Plut. *Mor.* 825C-D.

(116) Cf. R. Weil, *Aristote et l'histoire*, Paris 1960, 350.

(117) VII. 155.2.

(118) *Pol.* 1292b 4-5.
(119) 紛議を惹起した真の原因は論及の限りではない。
(120) もしもこれが六世紀の事象とするならば、ガーモロイ体制は一旦失遂して「最善の国制」に席を譲り何時の日か復活した事となる。「最善の国制」解体後の体制についてはアリストテレス、プルタルコスは黙して語らない。なお、ガーモロイの没落に関しては以下に述べる。
(121) この点、サモスのゲオーモロイが参考を供す。これは安定的たるには遠い。芝川「サモス国制史の一断面」、『大手前大学論集』一五号、二〇一四年、八－一一ページ。
(122) Plut. *Mor.* 304A においては、サモスにおけるゲオーモロイの支配は oligarchia と明記される。
(123) Cf. Dunbabin, 414-415.
(124) Ar. F 603.1-3 (Gigon).
(125) *Id. Pol.* 1302b 27-32.
(126) *Ibid.* 1315b 36-37; Diod. XI. 38.3.
(127) Hdt. VII. 155.2.
(128) Thuk. VI. 4.2, 94.1; Polyainos, I. 27.3.
(129) Hdt. VII. 156.2.
(130) *Ibid.* VII. 156.3; Strabon, X. 1.15.
(131) Hdt. VII. 156.3.
　ゲロンの許、シュラクサイの民衆がその地位を高めたとの説は存す。„die demokratische Militärmonarchie der Deinomeniden“ (Hüttl, *op. cit.* 57) というものである。これに関しては Wickert, *op. cit.* 1485。例の著名なる民会の件（Diod. XI. 26.5-6; Polyainos, I. 27.1; Aelian. *Var.Hist.* VI. 11, XIII. 37 他）が事実としても、それは予め計謀された芝居に過ぎない。
(132) レオンティノイのアイネシダモスに関しては Ar. *Rhet.* 1373a 22-24。また、本篇一五ページ。
(133) Schol. Aeschin. *In Ctes.* 189.
　グラウコスは農夫の小倅であったという。Pausanias, VI. 10.1. 卑賤なるが故に使用に便という事である。サモスのマイアンドリオス、レギオンのミキュトスと同断である。芝川「サモス国制史の一断面」二一ページ。Hdt. VII. 170.4.
(134) Thuk. VI. 5.3. カマリナは一度（ひとたび）ならず住民の掃殄を経験している。
(135) Hdt. VII. 156.2.
(136) *Ibid.*
(137) Diod. XI. 72.3.
(138) なお、本篇一九ページ。ゲロンの統治は善政の評にて彩られる。Diod. XI. 23.3, 67.2-3; Plut. *Mor.* 551F-552A; Aelian. *Var. Hist.* XIII. 37 他。農業奨励は Plut. *Mor.* 175A, 552A。彼が財産没収や土地再分配といった施策に訴えなかったのは事実となすべきである。ただ、彼の評判に関して資

するところ最大なのはカルタゴ軍殲滅であった（本論文一二ページ）。ゲロンは艦隊建造に尽力。ペルシアとの決戦を目睫に控えた時点にて、ギリシア方使節に対し、三段撓船二百隻援助の用意ありと揚言した。Hdt. VII. 158.4. 付言するに、シュラクサイ以外にはシケリアの海軍は弱体なるが如し。Dunbabin, 199. Thuk. I. 14.2 をめぐっては cf. Dunbabin, 404–405。シケリアの騎兵は精強を以って著名である。この事はシケリア国制史に一定の刻印を与える。

(139) Diod. XI. 67.3–4. ヒエロンは間者を用いた。Ar. *Pol.* 1313b 12–15.

(140) Diod. XI. 49.1–2.

(141) *Ibid.* XI. 51. なお、アクラガスのトラシュダイオスとの戦闘は本論文一三ページ。

(142) アクラガスは先に触れた（一三ページ）が、ゲラの僭主政もこの時点にて仆れていたのであろう。

(143) Ar. *Pol.* 1315b 38.

(144) Diod. XI. 67–68; Ar. *Pol.* 1312b 11–16.

(145) Diod. XI. 76.3–5.

(146) *Ibid.* XI. 72.2, 68.6. ディオドロスにおける民主政概念をめぐっては本稿一三ページ。十一巻七二、二よりすると、それはむしろ僭主政の対極を指向する。

(147) *Pol.* 1304a 27–29. ただし、*ibid.* 1316a 32–33 では民主政となす。また、1306a 1–2. cf. Thuk. VI. 39.

(148) Diod. XI. 68.5. 他市とはシュラクサイの影響下にあった諸邦を指すか。なお、イタリア本土のレギオンにても、この時期、僭主政が崩壊している。Diod. XI. 76.5.

(149) *Ibid.* XI. 72.3.

(150) *Ibid.* XI. 73, 76.1–2.

(151) *Ibid.* XI. 76.5–6.

(152) Cicero, *Brutus*, XI. 46.

(153) トラシュダイオスはヒメラにて秕政を布く（註（50））。アクラガスの支配期間は長期に亘らなかった故、それは統治構造を震憾せしめる程ではなかったか。なお、本稿一三ページ。ゲラとシュラクサイはそれぞれ一五、二〇ページ。

(154) *Pol.* 1312b 7–9.

(155) 註（147）。*Pol.* 1312b 6 よりすると、アリストテレスは当時のシュラクサイを貴族政と解した事になる。

(156) 本論文八ページ。

(157) Diod. XI. 86.

(158) *Ibid.* XI. 86.5–87.

(159) *Ibid.* XIII. 34.6.

(160) *Pol.* 1304a 27–29.

(161) 本論文註（1）。
(162) 註（153）。同一九ページ。前古典期のシケリアにおいては民衆煽動によって権力に達した者必ずしも多数とはせずか。
(163) K. F. Stroheker, *Dionysios* I, Wiesbaden 1958, 53.
(164) バージャー（*op. cit.* 63-64）の語る social revolution はディオニュシオスに妥当する。この点において従前の僭主を凌駕する。
(165) *Ar. Pol.* 1316a 35-37.
(166) シュラクサイ。本論文二〇ページ。また、アガトクレス抬頭時のシュラクサイ。Diod. XIX. 6.6, 8.1（後者では chariesteroi).
(167) レオンティノイ。本篇九ページ。ゲラ（同一五ページ）では dynatotatoi。
(168) beltistoi と gnorimotatoi は Plut. *Timoleon*, 1.6. これはティモレオンのシケリア渡航直前におけるシュラクサイ。
(169) endoxoi, epiphanestatoi は Diod. XIX. 4.3。これもアガトクレス権力掌握時。
(170) 一例を挙げてみよう。アガトクレス以前、シュラクサイの国制を左右したのは六百名である。これは epiphanestatoi の寡頭政とされ、また dynasteia や hetairia とも呼ばれた。これらが祖国を支配した edynasteusan tes patridos というものである。また、endoxoi andres がこれに協働した（Diod. XIX. 3.5-6.6）。
　これらの語が前古典期に関して使用される場合、在来、身分制的支配が指示されると解されてきた。dynasteuein や prosetairizesthai は例えばヘロドトス五巻六六に現れる。これはクレイステネス改革前夜の叙述である。これらの語は「貴族政的ピラミッドの頂点に立っていた」（W. G. Forrest, *The Emergence of Greek Democracy*, London 1966, 191）などと把握されてきた（芝川、前掲書二一六、二四二ページ註（117））。
　かくすると如何相成るか。四世紀一〇年代のシュラクサイにあって「身分的政治」が演じられたとなさねばなるまい。然るに、これは「古典学説」としては悖理である。それによれば「貴族身分」など夙に衰滅しまっていた事になるのであるから。
　epiphanestatoi などはディオドロス（XIX. 5.6）の記す如く、評判と財産において卓越する者なのである。この点は時代の如何に拘らず渝るところがない。この程度のものであれば、ディオニュシオスの処置により一旦潰滅的打撃を蒙っても、新たなるエリート層が発現するのである。
(171) 註（100）。
(172) Cf. Berger, *op. cit.* 63-64.
　バージャー（62）は aristocracy of first settlers なるものを説く。シケリアにては最初の植民者やその子孫が閉鎖的身分の形成に進んだというものである。さりながら、アルンヘイム（M. T. W. Arnheim, *Aristocracy in Greek Society*, London 1977, 53）を披見するに、西方における「最初の植民者による貴族政」として例示されるのはシュラクサイのガーモロイのみ。然るに、ガーモロイとはそのような範疇に属するものではなかった。本稿四章一節。
(173) Cf. Stroheker, *op. cit.* 6-7; C. Mossé, *La tyrannie dans la Grèce antique*, Paris 1969, 118-119.
(174) E. D. Frolov, Die ersten Unternehmungen und die Machtergreifung Dionysios' des Älteren, *Klio* 55, 1973, 89-90. 四世紀におけるポリス廃頽なる現象の実否をめぐってはW. Eder (Hrsg.) *Die athenische Demokratie im 4. Jahrhundert v. Chr.*, Stuttgart 1995.
(175) J. Deininger, „Krise" der Polis? K. Dietz, D. Hennig, H. Kaletsch (Hrsg.), *Klassisches Altertum, Spätantike und frühes Christentum*, Würzburg

1993, 72.

(176) 芝川、前掲書一七－一八ページ。

(177) また、本論文二〇ページ。

(178) 上下の秩序、拡大、固定化の傾向も看取される。ギリシア本土の状況（芝川、前掲書三三八ページ）と較量するのも興なしとはしない。

(179) ここでザレウコスとカロンダスに一言しておく。もっとも、前者は南伊ロクロイの出身ではあるが。カロンダスはシケリア島カタネの出とされる。この両名共、伝説的要素多く、年代も定かとはしない。これらに関しては学説史において貴族政的（Dunbabin, 72-74; Stauffenberg, *op. cit.* 72, 102）とか、貴族政から穏健寡頭政への移行を示す（Roebuck, *op. cit.* 1928-1930）などと身分制的関連の中で語らる事少なからずとした。さりながら、これらの立法中、国制に関る事確実なるは裁判所についての工夫程度のものである。これはアリストテレスによってカロンダスの法律とされる（*Pol.* 1297a 21-24）。裁判に欠席した場合、富者には多額の罰金が、貧民には少額のそれが科せられるというものである。これはアリストテレス的に語るならば国制の工夫であって、寡頭政（*ibid.* 1297a 35）或は「国制」の特質である（*ibid.* 1294a 37-39）。なお、ザレウコスに関してストラボン（VI. 1.8）の引くエポロス F139（Jacoby）は法治主義の発達を意味するのみ。